

唐津の塩

～江戸時代からの製塩・昔と今～

唐津の塩の歴史は、下記の2ヶ所（塩屋村・高島）が文献に残っている。

■塩屋村

唐津藩初代藩主寺沢志摩守が、慶長年間（1596年～1615年）に松浦川を改修し、川州であった塩田を開拓して開いた村で、鏡山の北西松浦川河口右岸の平坦地に位置した。塩屋村には舞鶴城築城以前に製塩所（塩焚竈）があった。そのため舞鶴城築城後一村をなして塩屋村といいい庄屋をおいてあった。

塩屋村の地名の由来は、海水の入る砂州上の塩田という意味から名付けられたと伝えられている。初めは唐津藩領・慶安元年は幕府領・同2年からは唐津藩領で鏡組に属した。（鏡村史に旧塩屋村からは、塩釜の破片がたくさん出土したという記録が残っている。）その後塩釜の跡に塩釜神社を建設したが、明治16年塩屋村が鏡村に合併された時、神社の祠は鏡神社の境内に移され、塩屋村という名称も使われなくなったのである。しかしその後、旧塩屋村の住民らは11月15日の塩屋大明神の祭礼には祠の前に集まり甘酒をお供えしてお祭りをしたとのことである。（現在は行われていない。）

■高島の塩

高島の塩がいつ頃から産業になったかは定かではないが、江戸時代には既に生産されていたようである。古くは高島の東の浜に塩田があったと言われているが、次第に西側に移り海水による製塩業が行われていた。しかし、質が落ちたので明治30年代に蒸気力で海水を汲み上げて釜に送り沸騰させて製造した。釜は20余箇で、一昼夜の製造30余石^{※1}で後50石位に増産している。石炭消費は12000斤（一斤は100匁）位であった。明治36年に5120石7987円、37年に6267石8586円、38年に5055石8082円の生産額を示した。当時米一表(60kg)の値段は4円であったから島民の生活も活気があり塩の生産は宝物であった。しかし、塩の専売制が敷かれるようになると高島の製塩業も他の業者に勢力を取られ、大正12年頃廃止となった。そのため、島民の生業は、製塩・荷役から漁業へと移っていった。

現在高島の「宝当神社」は、宝くじ当選祈願で有名になっているが、この宝当神社は、塩屋神社の境内社である。塩屋神社は、その昔高島の住民を海賊から守った野崎綱吉という武将が島民と建立したのが山王宮で、それが後に塩屋神社と呼ばれるようになったのである。

1586年島民の信望を集めていた綱吉が亡くなった時に、彼の墓は綱吉神社として祀られ、今も守護神として代々語り継がれている。そして明治43年綱吉神社に「宝当神社」と書かれた鳥居が奉納されてからは、綱吉神社は「宝当神社」と呼ばれるようになった。

何故「宝当」となったかはわからないが、塩が島を繁栄させる宝と思われた事から「宝島」それが転じて宝当となったのだといわれている。

なお、佐賀県立名護屋城博物館にある唐津藩・大久保氏時代に描かれた「唐津城図屏風」には高島の塩田が描かれている。

※1 石（こく）……………1石=100升=約150キログラム（1年に1人が消費する米の量といわれる）

分野

産業

◎地図・写真・統計資料など



塩屋神社のある高島
(唐津市フォトライブラリーより)

◎引用・参考文献（出典）

- ◆ 『日本地名大事典』
- ◆ 『松浦業書第一巻』
- ◆ 『唐津市史』
- ◆ 『鏡村史後編』

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html